

新約聖書哥羅西書

全

耶穌降生二千八百八十年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書哥羅西書

明治十三年

日本橫濱上梓

使徒パウロコロサイ人よおくる書

第一章 神のむねよりて耶穌キリストの使徒とある

パウロおよび兄弟テモテニ書キリストにあるコロサイニ

とての聖徒とちやうあんキリストの兄弟たちよおくる。ねがはる

あんぢうとて此父ある神および主いかにキリストより恩

寵と平康をうけよ。○三我儕あんぢうがキリストの父を信

ずる。いかにその聖徒をいかにするにても聞てあんぢう

の爲にいのるとき恒よりその主いかにキリストの父ある

神よあんぢうが如此せむとを愛するあん

ぢうにたぬ天にたぬ人いかにその主の即ち

の真理のこゝろを此あつてき——とこのものを望
がゆゑありこの福音はせうふはうきき——と
きださう且みんちうがこゝろをきいて神のめがを眞實
さうり——日ようみんちうのうち果をむきびまほく大
よあきき——世界も果をむきびて大よあきき——
福音はこゝろの愛するあふ役者エバフラスよりみんち
が學るところのののありエバフラスはみんちうの
の忠信あるあふありハ彼さきよみんちうが靈よ
て懷るぢふをさきよ告九このゆゑよみんちうが靈よ
一日ようみんちうのなめだるば祈禱を——のう求ね
る

ちういみんちうが靈のゆゑあるまほくこれ智慧と
てこゝろを神旨をあり十まほくこのこと主をよ
んがため其こゝろにあつて日とおくりまほく
事よりて果をむきびう神をあふよりて中よ徳を
まほくまた神のさうすの權威よあふひて賜を
能力をよ強あり凡事よろこびて恒忍う久耐また
ききよ光よあるせふこの業の分をうくるにたる者
とあふよめたまふ父のめがを感謝せんこゝろを
暗のけんあよりて救ひだすその愛子のこゝろ
つなまほく十子よよりて贖まほく罪のゆ

ぢうざる全^{ソウ}なるの富^{トモ}をえう父^チある神^{カミ}とキリストの奥義^{オウギ}
をうて安慰^{アムイ}をえんことを欲^{ホツ}するあり 三 智慧^チと知識^チのた
くをへい 一切^{ソク}キリストはうきとあるあり 四 誰^{タレ}うても巧言^{カウゴン}を
めせるんぢうを欺^{アサ}らとあるんため我^{われ}これらのことを
りく^り 五 夫^そも肉體^{ニクタイ}あるんぢうと離^{はな}れるといふとも靈^{レイ}ハ
あんぢうとともふとありて喜^{よろこ}まんぢうが次序^{ツソ}あるとキリスト
をあんぢうの信^{しん}ののたきを見^みあり 六 あんぢうもや主^まキリ
ストの世^よに承^{うけ}たきを彼^{かれ}はありて何^{なん}もむづゝあんぢう
根^ねをうきとあき彼^{かれ}はありて徳^{とく}をたて又^{また}をへをうけたる
ところは從^{したが}てあんぢうをうたゝゝ此^こをまゐく大^{おほ}うて

感謝^{カンシャ}せよ ○ あんぢう慎^{しん}づゝあそくハキリストはあだ
ぢ人のつぢくと世^よの小學^{せうがく}はあだぢひ空言^{くうごん}ある理學^{りがく}をも
てあんぢうの心^{こころ}をうきとん九 そま神^{かみ}のみちだきとる徳^{とく}を
こゝろく形體^{かいたい}をありてキリストはまあり 十 彼^{かれ}はまづての
まつりぢう 權威^{けんい}のうらあり。あんぢう彼^{かれ}はありて全備^{ぜんび}
まゐることを得^えあり 十一 あんぢう彼^{かれ}はありて手^てをめてせざる
割禮^{わい}とく即^{すなは}ちくのうぢをぬぎきるところのキリストは
のつまひあり 十二 あんぢうバプテスマをうけて彼^{かれ}とまひは葬^{もく}
られまた死^しう 彼^{かれ}とまひはがつせし神^{かみ}のはたきと信^{しん}む
るようて彼^{かれ}とまひは甦^{よみが}らききたり 十三 あんぢう前^{まへ}より

のろくのつみと身よりけいあきとよりて死なるもの
あり。されど神あんなちうをうてまての罪をゆるし彼とど
めは生しめあつ手うてあるせしとらちのつとをせむ
る規條のふと即ちまてにさうふりのを塗抹しを中間
よりよりさう釘をうてその十字架よりつけたまへり又ま
つりごとをとるものと權威あるものをほろぼし彼儕をまて
てのゆれより示しキリストよりて勝はれり○まの故にあ
るむハ飲しとろむハ食しとあむハ節期あるむハ月朔
ろむハ安息日のことより人をうてあんなちうを議せし
むることをあつとせしむるハ皆きだうんとまての影より

てそのまのことの形ハキリストよりつけり十八節うんだることを
天使とはいはるることよりよりてあんなちうの褒美をあきむ
きとらんとまて人よりそのもうびをうてあんなちうの
とき人よりまだ見ざるものをうてひ己のころよりあ
ひて安んじより首よりつけしをせざるあり十九節全體のう
らよりよりろくの節と維をうて相たをけ相つうあり神
よりだてられ長あり二十節よりあんなちうキリストとまのより
にて世のせうぐよりよりあきだうんよりあんなちう世よりあり
て日をおくるものよりより人のいまりめと教よりあたぐひ
捫るよりより營るよりより觸るよりよりいふ律法の下よりあるや。こ

りの禁じたるものいまだて人にまをす用きなつてゐるなり
これらの規條へみづから縦よして拜するをある。この
謙遜の身をおしまざるよりて智慧あるものこそよく
みゆきとも實にたふときりのにあはば唯にこれの慾をみ
ちたうするあり

第三章 既にあるんぢうキリストとまをすよみづからだれば天
はゆるめのと求むキリストのこゝろありて神の右にさ
たまへり。あるんぢう天にあるものをおのひ地にまをすもの
とおのふあるれ。夫あるんぢうの死のよてその命ハキ
リストとまをす神のうちよのこゝろまをすあり。このまをすの命

あるキリストのあはれんときマをすもこのまをすの榮の
ありとあるんぢうなり。此故にあるんぢうの地にある肢體
はあはれん。奸淫汚穢邪情惡欲および貪婪とてまをすべし貪
婪はあはれん。偶像を拜するをある。六のまをすの事より
て神のうちよのあはれんまをすものよのこゝろなり。あるんぢうもさき
は斯のころき人のありと日をわたりとてハ此等の惡事
をつねとわたりとてハさきとあるんぢう。今ハまをすのこゝろ
の惡事および悲滅忿怒暴戾とて。謗讟醜言をあるんぢう
の口よりまをすべし。あるんぢうもさきと舊人とその行をぬぎ
て、いまだしきひしを衣たはれなれ。ひしを誑をいふあるんぢう。干

この新人はいよくあつたなり人をつくりしもの像は
あつてひて知識はあつたり士
うくのうときいさうてハ
ギリシヤびく、ユダヤ人あるひに割禮あるものときつまい
き者あるひに夷狄あるひにスクテヤ人あるひに奴隸あつひ
に自主の別あり夫キリストに萬物のうへにあり亦すべての
ものの中より○このゆゑにあんぢう神にさうむき
聖潔うに愛せうものとなりたきを慈悲めぐみ謙遜に
うに忍耐を衣よ十三あんぢうたがひに容忍をうに人
せむべきことあつてをゆるせキリストあんぢうと恕た
まくるごとくあんぢうも然まづ此のうくの事のあり

一愛をくちへよ。あふに衆徳の帶あり十五あんぢうキリストの
たまふ平安をしそその心をつくらざうにめよ。あんぢう一
體はありてこの平安にいたるべき召をうむむらんぢ
ら恩恵はうんむべ一十六キリストの道をしそあんぢうの心は
とめて充足しめまての智慧より詩と歌と靈よりん
てつくむる賦をりてたがひに相をうに相をうに恩恵は
うんどもこのうのうは神をさんびまづ十七あんぢうの
爲とこの諸事あるひに言あつひに行みる主の世の名
のためはこれとなし彼よりてちるあに神よりんやを
べ一十八妻ありのうその夫にさうさふべ一此に主はあ

るもの、あるを願ひ、いとあり。十九、夫あるものよその妻をあひ
まづ、苦をりて、こゝをあらうかなう。二十、子たるものよそ
んぢうまづての、こゝ二親はあにがふ。二十一、こゝ主のよろこ
びたまふ、こゝろあり。二十二、父あるものよそんぢうの子をのり
らまゐる、あうまおそく、いその氣うあん。二十三、僕あるものよま
づての、こゝと肉體はつけ。主人はあうまづ、人をよろこ
むもの者、こゝとくた、眼前のこゝとをつとむる、こゝとあく誠
心をりて神をおそれ、あにがふ。二十四、あんぢう何事もひこし
つゝある、かゝく、せに主はつゝある、こゝとく心より、こゝとを
行づ。二十五、そのあんぢらへ主より報賞ある。二十六、嗣業をうくるに

とをあるものよまづ、あんぢう主ある、キリストはつゝある
づ。二十七、不義をおこす、あにの、亦そのあにのむくをうく
主は、あによりみたまふ、こゝとある。

第四章 主人あるものよそんぢうもまづ、天は主ある、こゝとを

あれ、バ義はあう、い公平をり、その僕をあう、あう。○

ニ、ね、祈禱をあら、あに、こゝとあう、感謝と、こゝとあう、

ある、あう、三、また神は、これら、道をつたふる、の門をひく、我

儕を、あう、キリストのおくぎをうたう、あう、四、我は、あう、こゝと

の、あう、こゝと、奥義をあう、あう、あう、あう、あう、あう、あう、あう、

の、あう、あう、あう、我は、こゝと、あう、あう、あう、あう、あう、あう、あう、あう、

新約全書 哥羅西書第四章 自五至四章十節 九

五 あんぢう 機とうぐい 智慧をりて 外にある人よりまじり
るべし 六 あんぢうの言つねは 恩をりあふう 鹽をりて 調
和す。さうむいろうて 各人よこたふべきうを あんぢ
七 まが 愛する 兄弟ちゆうある 役者それとすのよ 主よつら
ろ 僕 テキコつら 事をこしくあんぢうよ 告あせん 八 我
このきを殊よあんぢうよ つらまね 九 彼をしそあんぢうのこ
とを知あんぢうのころを あぶさめしめん ためなり かま
た 忠ある まが あひたる 兄弟あんぢうのうち 一人ある 十
ネシモをのれとすのよ 遣せり。このまら 此處のころををせま
ぐくあんぢうよ つけあせん 十一 我とすのよ つかがる アリ

スタルコ および バルナバの 甥マコ あんぢうよ 中をきを問このマコ
のことよ ついといあんぢうよ まや 命をうけたり 彼
んぢうよ いちうバコきを接す 十二 エストとるがくる イエス
あんぢうよ 安をとふ 割禮をうけしもの 中たふ 三人
のころまきとすのよ 神のくに ためはくしけり 我
よよりて 安慰とるあり 十三 あんぢうのうち 一人よりて キ
リスト 耶穌のあひべ なる エバラス あんぢうよ 中をきを問この
まきをつねよ あんぢうの ためは力を つて 祈禱をありな
んぢうが 完全をえ 心をうさうし 立まぶそのころと 神のむ
ねは あひがらん ころをねがへり 十四 我のまが あんぢう
及



11898

1.666

立教大学図書館



C0011898